

福祉系 対人援助職養成の 現場から³⁸

西川 友理

保育士と言葉

保育士養成の現場に来て5年、以前の職場と比して重要視されることに「言葉」があります。子どもに関わる仕事だから、子どもに真似されても大丈夫な言葉づかいを普段から心がけましょう、ということです。他の対人援助職養成の場は言葉遣いに寛容かという、そういうわけではないのですが、子どもに関わる職場はとりわけ言葉にデリケートです。

最低限のマナーとしての技術的な言葉

短期大学に入学した1年生の中には、友達に話すようなぞんざいな言葉、いわゆるタメ口で教員に話しかけるような学生がいます。別にタメ口だろうが何だ

ろうがいいとは思いますが、上記した通り、問題はこの場が“対人援助職養成”、しかも“保育者養成”の場である、ということなのです。保育職に就いたら、どんな人とどんなコミュニケーションをすることになるかと思うと、相手を尊重していることを表現する基本姿勢として、やはり敬語は使えるようになっておきたいところです。

そこで私がまず学生に敬語で話すようにしました。日常の学校生活の中で、敬語でコミュニケーションをする環境を作ろうと考えたのです。

「学内では基本的に敬語でしか喋りません！」と宣言した日、

「そんなことしなくても、アルバイトではお客さんに敬語で喋ってるもん、大丈夫！」

と言っていた学生も、いざ敬語で話そう

とするとつかえてしまいます。そこで初めて、アルバイトで使っている敬語は、マニュアルに則った単なる呪文であることに気がきます。

コミュニケーションは相互性のあるものですから、学生がぞんざいな口調で話しかけて来ても、敬語で返すと、たいていは敬語で返事が返ってきます。最初はたどたどしい敬語であっても、徐々に自然な敬語が話せるようになります。敬語で話すと、考え方や所作、コミュニケーションまでもが、敬語にふさわしいスタイルになります。

言葉の影響力は大変大きいものです。

実感を伴い伝わる言葉

実習を終えた2年生が

「実習までに“み・かん・だ”をきちんと書けるようになっておかないといけないよ」

と1年生にアドバイスしているのを聞きました。

1年生はキョトンとしています。

「そっか、まだ習っていないか。あのね、“み・かん・だ”っていうのはね…」と説明しています。

“み・かん・だ”とは、「み（見聞きしたこと＝事実）かん（考えたこと＝考察）だ（だから、どうする＝次回への課題）」を分けて考え、整理するスキルです。

実習中に出会ったことを自分なりに整理し、他者が読んでも分かりやすい記録を書けるように、この3つを整理して考える方法です。私がある日の授業で、突然、勝手に作った言葉です。それが気

付けば、3年ほど前から、本学の学生の中では当たり前のように使われる言葉になっていました。

そして現在では、実際に現場で使えるスキルとして先輩が後輩に教えてくれています。実習という、学生にとって大きいイベントに関わる言葉だけに、実感があるのだと思います。実感を伴う言葉は生き残っていきます。

実感を伴う言葉、というのはまた、心に深く伝わる言葉、ということでもあります。

大学時代、現在同志社大学の教授である上野谷加代子先生に「役割の木」という概念を教えていただきました。人は生活の中で様々な役割を果たし、その役割ごとにあらゆる社会関係を取り結んで生きているということを一本の木に例えたお話で、大変印象に残っています。「人が社会で存在するっていうのは、こういうことなのか!」と、深く感銘を受けました。今では、社会福祉分野の授業をする際に、私もこの話を時々しています。

前任校で授業を受け持っていた学生と卒業後、5年ほど経って会う機会がありました。久しぶりに出会う卒業生たちが、私の顔を見て最初に言った言葉が“役割の木”でした。

「先生！先生の授業で聴いた、“役割の木”！あれ、めっちゃ覚えてる！」

「そうそう、今現場で実践をしている中で、ああ、あれってほんまにそうやなあ！って思うんです。」

と話しかけてくれました。

実感を伴って深く受け止めた言葉は、

自分が発する際に、自分が持つ実感の深さと同じような深度で、相手にも伝わるような気がします。それは、単に相手に話が分かってもらえるとか理解出来るように伝えるといったことではなく、言外の思いも含め、響いていくということです。

意味を消費されてしまう言葉

一方で、独り歩きして本来の意味を失う言葉もあると感じています。

少し前までよくメディアで見かけた“ネットカフェ難民”という言葉も、最近はあまり見かけません。しかし実際は今もネットカフェ難民と呼ばれる人はいます。

2016年～2017年に東京都が「インターネットカフェ・漫画喫茶等の昼夜滞在可能な店舗で寝泊りしながら不安定就労に従事する「住居喪失不安定就労者」等」に行った調査によると、「路上で寝泊まりすることがある人が43.8%」「調査対象者のうち、4.5%が正社員」等の実態が見えてきました。

2007年に厚生労働省が行った調査から約10年ぶりに行われたこの調査の結果は、昨年ほんの少しだけ話題になりましたが、またすぐに日々の雑多な情報に紛れ、世間の関心から外れていきました。

2007年から2009年にかけて“ネットカフェ難民”という言葉が流行したきっかけとなるテレビ番組を制作した水島宏明ディレクターは、過去に特派員として取材した旧ユーゴスラビアやルワンダの内戦時の難民キャンプの惨状と、ネ

ットカフェで暮らす若者たちに類似性を感じ、“ネットカフェ難民”という語をつくり出したとのこと。

「…この言葉が流行語となり、どのテレビ局もこの問題を追いかけて始めると、水島ディレクターが強調したかった「難民」性はあまり顧みられなくなった。後追いの番組では、のぞき見趣味的な取材も散見され、「ネットカフェ」という場所を居住の場としていることの特異性が強調する傾向が強まっていった。」

最初は確かに、強い実感を持って使われた言葉が、メディアを介し、世間に広まると、やがて扱いやすいところや、特異性があるところばかりがクローズアップされ、盛んに取り沙汰され、その結果飽きられ、世間から関心を持たれなくなっていく。こういうことは、よくあるように思います。

特に近年はLGBTや依存症などにまつわる報道が大変目につきます。それらのトピックは、本来とても大事に、丁寧に扱われ、語られてきた言説や歴史があるものです。しかし、テレビのワイドショーなどでセンセーショナルな部分だけがもてはやされ、まるでファッションのように、タピオカブームのように、あるいは数週間で消える一発芸人のギャグのように、ただただ商品化され、消費され、流行りすたりのある言葉になってしまいそうだと感じる場合があります。

流行りすたる言葉に流されないために

流行り言葉が全部だめだというわけではありません。世間の耳目が集まると

いう事は意味がある事です。しかしそれらの言葉は、何か表面だけが削り取って消費され、重みや深みが伝わらないまま、サラッと消えてしまいがちです。

対人援助職、とりわけ保育士など子どもに関わる人は、流行りすたる言葉に流されず、それらの言葉の意味を深く受け止める感度やセンスを身に着ける必要があるように思います。耳にした言葉の意味をきちんと受け止め、相手に言葉の意味をきちんと渡すためです。

そのためには、まずは自らに深く伝わる言葉に直接触れる機会を増やし、実のある言葉、実のある文化を内面化（深く身に着ける）し、言葉に対する感度やセンスを高めることが大切です。

直接、生の声で、他者の言葉に触れる。

数年前、保育者論の授業で、毎回の授業の最初に10分ほど黒柳徹子著『窓際のトットちゃん』を読み聞かせたことがありました。黒柳徹子さんの小学校の頃の思い出がたくさん描かれている、世界的ベストセラーです。この本に出て来る小林先生が、本当に素敵な、子どもを大切にする人なのです。ぜひ学生に、トットちゃんという人の面白さと、小林先生の素晴らしさを伝えたいと思い、読み聞かせをしようと決めたのでした。

授業の前に出来るだけ覚えるようにして、学生皆の顔を見ながら、少しずつ読みました。15回の授業ですべてを読むことは出来ませんでした。学生は結構楽しんでくれていると感じました。

卒業時、「あの時間、好きだったんで

す」と言ってくれた学生がいました。

「私も、子どもに読み聞かせをしたいから。」と、卒業前に自分で『窓際のトットちゃん』を買い、児童養護施設に就職した学生もいました。

近所の雑貨屋で、月に一度、絵本の会があります。大人が集まって、自分の好きな絵本を紹介するという会です。自分が普段手に取らない、しかし誰かにとって大切な思いのこもった絵本に出会うことが出来、私も時々自分の紹介したい絵本を持って、遊びに行きます。

絵本ということで、どの本もたいていそれほど長くありませんので、参加者は紹介として大抵読み聞かせをします。

ある時、この会の参加者が言いました。

「不思議ね。読み聞かせをしてもらって、すごく気持ちいいね。」

その場にいた皆がうなずきました。

ある哲学者の講演会に参加しました。会の数日前、その哲学者の書いた最新刊の著書を購入し、読みきって、当日を迎えました。そして、あわよくばその本にサインしてもらっちゃおう、と思い、講演会当日は、その本を持っていきました。

その日、お話されていた事は、本に書いていた内容とほとんど同じでした。しかし、本を読んでいただけではさらりと読み流していた部分が強く印象に残ったり、新しい見え方がしたりと、とても不思議な体験をしました。内容は知っている事が多いのだから退屈してもいいはずなのに、なぜかちっとも退屈せず、大変面白く聴くことが出来ました。終わった後、深く感銘を受けた私は、サイン

をもらおうと思っていた事も忘れて、帰りの電車で再度その本を読み耽りました。本の中の言葉が、全く違った響きを持って胸に迫ってきました。

ダウンロードした曲やCDの方がずっと音質は良いし歌詞もわかりやすいのに、わざわざコンサートに出かけて行く私たちです。テレビドラマよりもずっと狭い、舞台というスペースで繰り広げられる演劇が、とんでもなく大きなスケールを持って、心に迫って来ることがあります。

生で芸能人やら有名人やらを見たというテンションの高さや、舞台演出の効果もあるでしょうが、それらを差し引いても、同じ空間をリアルタイムに生で共有する中で歌や話を聴くと、伝わってくるものが違うというのは多くの人を経験していることだと思います。

書籍や映画、テレビなどで出会う素敵な言葉もあります。しかし、直接生の人の声で聴く、という事は、なぜだかわかりませんが、何か特別なもの、いわば「その言葉を発する際の思いの深さ」ともいうべきものが不思議にこちらに伝わってきます。それは、「言葉にのせた思いの深さが、直接相手に同じ深さで響く」からではないか、と考えています。

何の根拠もない、ただの個人的な印象でしかないのですが、そういった理由もあり、直接その人のもとに出向いて行って直接言葉を聞く、あるいは直接自分の思いの言葉を届ける、ということが大切だと感じています。

スマホ育児と生のコミュニケーション

最近、幼児保育の現場では、“スマホ育児”がよく話題に上ります。まだ2～3歳のうちからどうやって覚えたのか自分でロックを解除し、You tube を立ち上げ、お目当ての動画を見る子ども達も、今や珍しくありません。

気になるのは、スマホ育児についての話題になると必ず「よい／よくない」で語られることと、大体の親御さんがスマホやタブレットを見せることに「罪悪感がある」と言っていることです。罪悪感があるということは、現状としては見せているけれど、見せたくないという思いを持っている、つまり意に反することを自ら選ばざるを得ないと感じているということです。

スマホやインターネットは、そもそも知識や情報の幅を広げてくれるものです。それにスマホ動画は、小さな子どもの子育てには、やっぱり便利です。子どもに見せておくと、それなりにキッチンとじっとしてくれていて、その間にどれだけ家事や仕事はかどるでしょうか。それに罪悪感を抱くまじめな親御さんが沢山いるということは、ずいぶん辛いことだと思うのです。それに、世間で言われるほど、幼児はスマホにかじりついてばかりというわけでもありません。しばらく見たら、他のおもちゃと同じく、飽きてしまう子どもも多いと感じています。だったらなおさら、子どもが You tube に気持ちを持っていかれている間に、何とか家事をしてしまいたいと思うでしょう。

スマホ動画によって、言葉や音の羅列や膨大な情報が、強い光の刺激とともに脳内に流し込まれます。それらは生の声ではないので「言葉に乗せた思いの深さが、直接相手に同じ深さで届く」というような言葉の伝わり方はしにくいと思います。しかし例えば、子どもと一緒に動画を見て、それについて会話するとか、動画を見せた後にどんな話だったか後から一緒に話すといった、生の言葉のやりとりが出来る強力なツールでもあるのです。

その他、使用の際のルールや、小学校に上ったら、中高生になったらと成長に合わせた配慮など、考えることはたくさんありますが、スマホを使わせるのが良くない、使わせないのが良い、という単純なものではなく、「直接、生の言葉でコミュニケーションをする大切さ」を認識していれば、スマホの使い方も漫然としたものにはならないのではないのでしょうか。

保育士養成と言葉

保育士養成の場に来て、絵本や素話、昔話など、言葉の文化に触れる機会が増えました。声に出して読むと、それらに込められた思いがわかります。丁寧に作られたものは、本当に美しい響きと、わくわくする喜びをもって心に伝わってきます。様々な言葉の文化に触れられる機会をたくさん経験することは、学生の言葉の深さのセンスを養うために大変重要です。

また、子どもを褒めたり、叱ったり、

注意したりといった場面でどう振る舞うか、いやそれよりも、子どもの言葉の深さをどう受け止めるか、そして大人側の思いをどう伝えるのか、といったことも、よく考えるようになりました。社会福祉士養成で、相談援助を教えていた時とはまたほんの少しだけ違う視点です。

敬語や“み・かん・だ”といったスキルとしての言葉は意識して使えるように訓練をします。しかし、言葉の深さを受け止めたり、伝えられたりするためには、上記したような言葉の文化に触れる機会を増やすとともに、まず学生と対話することが必要だと感じています。対話の中で思いや考えを受け止め、理解しようと試みたり、何とも名付けようのない感情に言葉を与え、口に出して表現したり、といった経験を重ねてもらえるようにコミュニケーションします。

直接言葉を聞く、あるいは直接自分の思いの言葉を届ける、シンプルですが、とても大切な、学生に伝えるべきことだと考えるようになりました。保育士養成の現場で、“言葉”が重視されるのは、何も言葉遣いや敬語だけの問題ではないようです。

.....

引用・参考文献

「「ネットカフェ難民」調査に見る貧困の今「私の若者論」の開陳はもういらぬ」 稲葉剛（立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科特任准教授）『論座』2018 年 03 月 29 日